



らのイナん

#17

敏腕編集・紺野司の一番長い日編

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽

らのけんってどんなお話?

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志^{こころ}しの高い部活動……。のはず、なんだけれど……。アレ？ 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない？

だがしかし！ それこそが「らのけん」の魅力！ という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです！



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……。のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



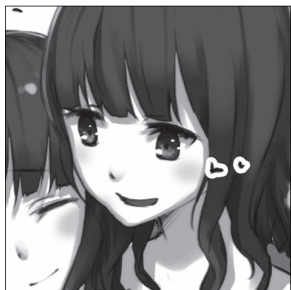
紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。



白井咲耶

華子の弟であり、かつ男の娘。見た目は華子そっくりでまるで双子のよう。
※ただしサイズは全然違う模様。



蔵内豪三郎

本名は蔵内・マリアンヌ・葉子。華子のデビュー作まんみのイラストを担当するイラストレーター。華子にやや危険な方向の好意を抱いている御様子……？



（わたし、何してるんだろう……いや、何をするんだっけ……）

A G 文庫編集部の人に、徹夜明けの朦朧とした状態で突っ伏していた紺野司はのろのろと顔をあげた。

その拍子に机の上に積み上げられていた大量のゲラが雪崩を起こし、ドサドサと司に降りかかる。

「――！」

やっとの思いでゲラの海から身を起こすと、司はうーんと唸りながら大きく伸びをした。

「来月の新刊の入稿はこれで全部終わったし、あとは付き物の再校を確認して印刷所に戻せばとりあえず一段落よね……」

司は編集部に備え付けのコーヒーマシンから熱いエスプレッソをカップに注いで、ようやく人心地ついた（※ちなみに付き物とは本の本体に巻かれるカバーやオビ（帯）などの事を指します。特にオビは日本独自の文化なので要注目なのですが、解説すると長くなりますのでまたいずれ機会を改めて）。

「紺野さあーん！印刷所から付き物再校来ましたー！」

編集バイトの照屋千加子がニコニコ顔で出校物を持ってくる。

千加子は週3でA G 文庫編集部でバイトをしている女子大生だ。ソバージュにちよつとだけそばかすが残った顔が愛らしい。瞳もくりつとしていてどこか小動物のな……愛玩動物的な

可愛さを感じさせる。

「ああ、ありがとう。早速チェックさせてもらうね」

「はい！」

司は大量のゲラを無造作に押しつけてエスプレッソのカップを机に置くと、真剣な表情で付き物再校のチェックを始めた。

「書名よし、著者・イラストレーター名よし、印刷所名よし、キャンペーン情報よし……あ、オビ表1のキャッチテキスト、こちらの赤字が反映されていないじゃないですか。ちよっと、照屋さん！」

「はい！」

千加子がまたニコニコしながら司の許に駆け寄ってくる。

「このキャッチテキスト、こちらから出した修正が反映されていないから、デザイナーさんに確認してもう一度修正したオビデータもらってくれる？」

「えーどこですか……。あ！ すみません、あたしこ直してもらったデータすでもらってます！ 間違えて一個前のデータを入稿しちゃったみたいです！」

「え？ そうなの？ もう、しっかりしてよ、照屋さん」

「はい、ごめんなさいい！」

あまり悪びれた様子もなく、千加子はまた自分の席に戻っていた。

そして……フリーズした。

「？ どうしたの、照屋さん？」

「……ないです……」

「は？」

「オビデザイナーのデータが入っていたフォルダがないですー！」

半泣きの顔で司に訴^{うった}える千加子。全身がふるふると小刻みに震えている。

「ちよっ……本当に!? 間違えてゴミ箱とかに捨ててない？ おちついてもう一度確認してみてくださいー」

「はあーい……」

千加子が力ない返事をしたのと同時に、司の机の上の電話が鳴る。

「はい、AG文庫編集部です。あ、印刷所の鈴木さん。いつもお世話になってます。……はい、はい。……え？ 『神を統べる者』5巻はもう真^{まこと}了^{りょう}でデータを戻したはずですが……え!? 間違えて4巻のデータが入ってるですって!? はい、はい、すみません！ すぐに確認して折り返します。ちよっと照屋さん!!」

「ないですーないですー」

司は大声で千加子を呼ぶが、すでに思考停止&無限ループ状態に入ってしまった千加子は、失われたオビデータフォルダを求めて彷徨^{さまよ}えるオランダ人ばりに彷徨っていた。

司が千加子に声をかけようとした瞬間、間髪入れずに司の机の上の電話が鳴る。

「はい、AG文庫編集部です。あ、ボニールームの峰浦さん。どうもいつもお世話に……えっ、この前いただいたアニメのキービジュアル全部描き直しになったんですか!? でもポスターもチラシもすでにあれで進行しちゃってるんですけど……はい、はい、判りました。とりあえず進行止めますので、またご連絡ください! ちょっと、照屋さん!!」

またもや電話のベルが鳴る。

「はい、AG文庫編集部です。あ、竜ヶ崎先生ですか。神統べ5巻お疲れさまでした。……はい? 5巻の3章を全部書き直したい? ……それは本気で言っておられますか? ……はい……はい。それは判りますが……でも、もう物理的に時間がありませんので、無理です。不可能です。あきらめてください。何度も言っていますが、決定稿となった時点ですでに修正不可能ですから! ……泣いてもダメです! それじゃ引き続き6巻のプロットをお待ちしております!」

叩きつけるように電話を切る司。

「ちょっと照屋さん!!」

「ないですーないですー」

「もう、いいからデザイナーさんに電話して謝って、もう一回修正済みデータもらってください!」

「ないですーないですー」

「照屋さん!! いい加減こつちの世界に帰ってきてください!!」

つかつかと千加子の許に歩み寄ろうとする司に、いきなり大量の人々が押し寄せてきた。

「紺野さん、アニメ制作委員会からグッズ案件の確認が来てるんですけど?」

「紺野さん、商品説明会用の資料はもうできてますか?」

「紺野さん、デザイナーさんから新シリーズのコンセプトの確認をしたいとお電話が」

「紺野さん、AG文庫大賞の評価シート、早めに記入しておいてくださいね」

「紺野さん、投げ込みチラシの新作情報欄修正されてないんですけど?」

「紺野さん、外部校正さんから先月の原価処理について確認したいとご連絡が」

「紺野さん、竜ヶ崎先生からお電話が」

「うわあああああー!! も、もうやめてええー!!」

キャパオーバーの限界の向こうまで追いつめられた司は、両手で頭を抱えてその場にうずくまってしまったのだ……。



「わたし、なんでこんなことしてるんだろう……なんでこんなバカみたいに頑張ってるんだろ

う……」

午前中に怒濤のごとく押し寄せた要処理案件をなんとか片づけた司は、仮眠室の簡易ベッドの上で一人そう呟いた。

まだ疲れが残っているせいか、頭がはつきりとしなない。

仮眠している間、何か夢を見ていたような気もする。幼い頃の情景が、ぼんやりと頭に浮かんできた。楽しそうに母親に向かって何かを言っているわたし。わたしはそこで何を話していたのだった……。

司は小さくため息をついた。

思い返せば毎月毎月締め切りに追われ、休む暇もなく、心をすり減らすだけの毎日……。同年代の子たちはそれぞれに幸せそうな家庭を築き、平凡ながらも充実した毎日を送っているというのに……。

自分はこうして毎日あくせくと働き続けているだけで……このまま10年、20年と無為に月日を過ごしてしまうのだろうか……。

そう思うと司はたまらないほど切なくなった。

もしかしたら考え直す時期に来ているのかもしれない。

一度立ち止まって自分を見つめ直すべきなのかもしれない。

司がそう、真剣に思い詰め始めた時。

「紺野さん、一条先生が打ち合わせで見えにられました」

仮眠室のドアが開いて千加子のはほんと司に声をかける。

「あっ、いつけない、もうこんな時間!! すぐ行きますのでちょっと待っててもらってください!!」



「よろしくお願いします!」

向かいの席から司の担当作家である一条れん——すなわち白井華子——が、「まんみ」4巻のプロットを印刷した紙を真剣な表情で差し出してくる。

「拝読します」

司はそれを受け取ると丁寧に目を通し始めた。

4巻はちよつと難航していて、プロットの直しはもうこれで5度目になる。

司はすでに「まんみ」も4巻目ということで、今回は敢えて心が折れそうになるダメ出しもしていたが、華子はそれに挫けることなく、しぶとく喰らいついてきていたのだ。

「……面白い……」

司が思わずぼつりと洩らした。

今まで司がしてきたダメ出しが、見事な形でプロットに結実している。これを読んだだけでも、完成原稿の形がはつきりと見えてくる。しかもそれが想像以上に面白くなる、という確かな手応えがあった。

ここに来るまでにはそうとうな葛藤^{かつつ}があったはずだが、華子はそれを見事に乗り越えてみせたのだ。

「ほんとですかー!!」

華子がきらきらとした瞳で司に迫ってきた。

「いや、本当に面白くまとまっていると思います。……よく、ここまで昇華^{しょうか}できましたね」

「ありがとうございますー! 紺野さんが頑張ってダメ出ししてくれるから、あたしも頑張らなくちゃって思っただけ! だから『面白い』って言っていただけるとすごい嬉しいですよー!!」

華子は打ち合わせ室のソファの上で踊り出さんばかりに喜んでいる。

その姿を見て、司は知らず知らずのうちに微笑^{ほほえ}みを浮かべていた。

『つかさ、オトナになったらおもしろい本をつくるヒトになるんだ』

不意に司の頭の中に、声^{こゑ}が響いた。

見ると華子の後ろに、さっきの夢の中で母親に楽しそうに話していた、幼い自分がそこに

た。

『そう、それはいいわね。つかさならきつとなれるわよ』

『うん、つかさ、ぜったいなるよ!』

夢の中の母親は優しくそう笑い、司の頭をそつと撫^なでてくれた。

「そうだ……」

司は思い出していた。

小さい頃、絵本が大好きで何度も何度も母親に読んでもらおうようにせがんだことを。

そして家中の絵本の内容を全部覚えてしまったことを。

それから紙に自分で絵を描いて、それをまとめてオリジナルの絵本を創ったことも。

それを幼稚園中のおともだちに配って回ったことも。

すべて、すべては、「自分が面白いと思っただけのを、他の人にも伝えたい。面白いと思ってもらいたい」という純粹な想い^{おも}のために。

ただそれだけのために、頑張ったのだ。

頑張って、頑張って、嬉しかったのだ。

「……だから、今があるんだ……」

「紺野さん？」

急にうつむいて黙り込んでしまった司を、華子は心配そうな表情で覗いた。

やがて司の膝の上でぎゅっと握られていた両手の甲に、ぽつ、ぽつ、と涙が零れ落ちる。

「こ、紺野さん、一体どうしたんですか!? 大丈夫ですかー!?」

「ありがとうございます!!」

「はひっ!？」

いきなり司に両手を握られた華子は、目を白黒させて戸惑った。

「わたし、大切なことを見失ってしまうところでした……。でも、今日、白井さんのプロットを見て目が覚めました! ありがとうございます! これからも一緒に面白い本を創っていきましょう!」

「は、はい! 勿論です!」

華子は訳がわからなかったが、真剣な司の瞳に気圧されて、とにかくコクコクと上下に首を振った。

そして両手をとってしっかりと誓い合う二人を、幼いつかさは、嬉しそうな笑みを浮かべて見つめていたのだった。

つづく

●「らのけん!」シリーズ掲載号一覧

★2014年

- G A文庫マガジン7月24日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン9月合併配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン10月27日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン11月27日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン12月25日配信号…らのけん!

★2015年

- G A文庫マガジン1月22日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン2月26日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン3月26日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン4月24日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン5月28日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン6月25日配信号…らのけん!
- G A文庫マガジン7月23日配信号…らのけん!

- 2 夢の最終選考編
- 3 はじめてのおつか……うちあわせ編
- 4 思い切って告白しちゃうぞ編
- 5 ペット攻めたり編
- 6 はじめての発売日編
- 7 かんこれ、始めました編
- 8 MISAO STRIKE BACK編
- 9 はじめてのこあいなつ編
- 10 その薔薇の名は……編
- 11 咲耶、襲来! 編
- 12 ライトノベルが出来るまで編

G A 文庫マガジン 8月21日配信号…らのけん!	13	もつとも冴えた3つのお題編
G A 文庫マガジン 9月18日配信号…らのけん!	14	華子、風邪をひく編
G A 文庫マガジン 10月22日配信号…らのけん!	15	はじめての対談編
G A 文庫マガジン 11月12日配信号…らのけん!	16	華子の一番幸せな日編